

『貝に続く場所にて』 石沢麻依

2021/9/4

@イルカとウマの読書会

空地空

【プロパティ】

- ・ テーマ：震災や、巻き込まれたヒトモノからの、時間的・空間的・精神的な距離との、向き合い方
- ・ モティーフ：震災と被災地/者 ドイツゲッティンゲンの街並み 美術史・神学 寺田寅彦
- ・ 学術的で冗長な文体とアカデミズム用語(美術史的な見方の援用)の多用
 - ←表現に文学性を持たせる効果を狙ってる？
(cf.表象・眼差し・象徴・位相・断絶・痕跡・二面性 etc.)
 - 特に会話文に不自然な表現が多い
- ・ マジックリアリズム？ 幻想小説？ 建物・人・冥王星の幽霊 背中の歯 乳房 etc.

【物語として】

- ・ 主人公はどんな旅をしたのか？どんな(内的な/外的な)葛藤があって、どう乗り越えたのか？
問題(野宮に向き合わなくてはならない)を抱えてはいるが、問題に対する葛藤の描写がない
 - ←外的なイベントも主人公の抱える問題・葛藤に直接関係がない

【意識の問題】

- ・ 当事者性/リアリティの欠如

震災について、壁にひびが入った・寒かった・寝苦しかった・星が綺麗だったなど、表面的な描写が多い

→九年後も折に触れ思い出すような、強く身体に記憶されるような痛みとなるだろうか？

←避難所や商店の混乱、情報の錯綜、周囲との諍いなど、東北より被害の少ない茨城でも状況は酷かった

- ・ モティーフの軽薄さ

実際には関係のない物事を無理やり結び付けて、感慨深く見せている/感じているきらいがある

ゲッティンゲン 被災地 美術史・神学的モティーフ 記憶 惑星 寺田寅彦 幽霊 アトリビュート

登場人物と聖人の結び付き

美術史/歴史的な方法論的な視点

→ある種の美術史研究者にはよくみられる

単純に理解が浅いと思われる部分も

「ウェヌスが誕生しそうなくらいの美味しさ」 p.360

「ウェヌスを生み出した淡い翠の水の壁」 p.356

←切り落とされた陰茎が、泡立つ海の混沌と交わって誕生したのがヴィーナス

→少なくとも美術史を大モチーフにするなら、適切な表現ではないと思われる

→単体では些細な問題だが、信頼のおけない描写のせいで、全体に散りばめられたモチーフが胡散臭くなってしまっている

【感想】

この物語を通して、著者は何を描きたいんだろう、と思いました

「震災や、それに巻き込まれたヒトモノからの、時間的、空間的、精神的な距離との向き合い方」を描いたのだ、といえは聞こえはいいですが、

テーマと向き合う意識が文章から感じられず、物語や描写が上滑りしすぎて、ほとんど何も描けていないように思えます

文学とは、なにをやってもいいものだと思いますが、知識をひけらかしたり、難しい言葉遣いをしたり、くどくど比喩を使ったりする文章は、僕は好きではありません

物語としても、震災の記憶をゲッティンゲンに重ねて曖昧に美化するのではなく、むしろ「ウェヌスのようにおぞましく」語る文章の方が、僕は好きです

同時代の作家として、文学とは、芥川賞とはなんなのか考えさせられる作品でした